

どんなに尊いご本尊さまをまつ祀ろうとも、どんなに優れた教えを説き示しても、そのご本尊さまを供養し教えを受け嗣ぐ人が誰もいなければ、今日まで、その仏さまの教えが伝えられることはありませんでした。

本日はご紹介するのは、だいほんざんそうじ大本山總持寺の二代目の住職である峨山韶碩（がさんじょうせき）ぜんじ禪師、私たちは親しみを込めて峨山様がさんとお呼びします。

峨山様は、本年、平成二十七年が、ろっぴゃくごじゅうかいぎ六百五十回忌にあたるどうげん禪師様で、道元禪師と並びまつ祀られるけいざん瑩山じきでし禪師の直弟子にあたる方です。

諸説ありますが、峨山様は西暦一二七六年、現在の石川県津幡町、能登半島の付け根にあたる地域でお生まれになりました。十六歳でひえいざん比叡山の僧として仏門に入り、比叡山での修行中、さまざまな迷いと出会いの中でけいざん瑩山えん禪師との縁により、二十四歳の年に比叡山を下りて加賀の大乗寺に瑩山禪師を訪ね、禅の修行に入られました。

二十六歳で瑩山禪師からさとお悟りの境地が認められ、禅の正しき教えをそのままにぎょう行じしました。各地で修行されたのち、現在の石川県羽咋市にあるはくい永光寺と、石川県輪島市にあるわじま總持寺そうじとを守り続け、その間、多くの弟子たちを育てていきました。それらの弟子たちの中で特に優れた五人の弟子は「峨山五哲」と称されました。總持寺の住職は、彼ら「五哲」が住職をしていた五つの塔がさんごてつ頭しょう寺院から順番に歴任していくという「輪番制」を敷き、お釈迦さま以来、禅を通して伝えられてきた正伝のりんぱんせい仏法が、後世まで長く、正しく伝えられるよう心を砕きました。

そのように生涯を過ごされた峨山様は当時としては長命な九十一歳にてお亡くなりになられたそうです。

ところで、峨山様が永光寺と總持寺をどちらも大切にまも護っていたという逸話があります。それは、二つのお寺は距離にして五十二キロもの隔りがありますが、毎日未明に永光寺の朝のお勤めをするとすぐさま山道へだを駆け上り、總持寺の朝のお勤めに向かっていたのだそうです。總持寺の修行僧たちは野山を越えてこちらに向かっている峨山様を待つために、敢えて、朝のお勤めのお経をゆっくりとお唱えしていたというのです。

この習慣は、今日でも大本山總持寺で続けられています。『大悲心陀羅尼』と

いうお経は、通常ではテンポ良くお唱えしますが、總持寺の朝のお勤めでは、ゆっくりゆっくりと唱える「真読^{しんどく}」という方法がとられています。

現在でも、峨山様の教えや、峨山様の教えを受け嗣いだ弟子たちの心が伝えられているのです。

このお経を聴きますと、もしかすると今でも峨山様は生きていらっしゃるのではないかと、私たちが護^{まも}って下さっているのではないかと感じずにはいられません。

— 終 —